

りて、物吉とよびて戸別に物を乞ふ、大戸小戸に應じて乏少なれば益を乞ふ、正月吉祥をいのるころに、さる者の來るを忌みて、遠く聲の聞ゆるより、家毎に施すべき米錢を出して、持出て我門戸に至らざるほどにはやく附與す、益を乞はれなすれば、門にいたりて脚躪する故に、さらぬやつに過分に皆あたふれば、一日の所得夥しとぞ、かくとは無けれど、他所他邦にも此類の群居する地は往々きこゆれば、同じ制度なりしなるべし、奈良の般若寺坂、伊勢の北多度村の邊、紀國の三井寺村の邊、その他聞及べるも多し、

〔塵塚談〕下癩病、數千萬人の中に有事なし、愚老顯道○小川若年の比、江戸出生の者に、只一人ありけり、其餘はみな他國の産也、今時乞食等に此病にて、臭穢のもの折ふし見れど、江戸産かつてなし、江戸を離るれば多く有よしなり、

〔建殊錄〕有怨首坐者、伯州人也、游京師、與我輩善、首坐一日謁先生○吉益東洞曰、頃者得鄉信、貧道戒師某禪師者、病腫脹、二便不通、衆醫皆以爲必死、將還侍湯藥、願得先生備急圓者而往矣、乃作數劑與之比、及首坐還、禪師僅存呼吸、卽出備急圓服之、下利數十行、腫稍減、未及十日全愈、於是其里中有患癩疾者、見其有奇効、謁首坐求之診治、首坐乃謝曰、京師有東洞先生者、良醫也、千里能瘳疾、無所不治、嚮所進禪師固其藥也、今又爲汝請之、其人亦懇托而退、首坐復來、京師則輒謁先生詳告其證候、且懇其治、先生乃作七寶丸二劑贈之、其人服之而全治矣、其明年來京師謁先生、則已如未病者焉矣、

〔近世物語〕三貞婦應天感

天保四年の頃、車力渡世善兵衛といふ者、數年癩病を患しに、次第に難症と成しを、妻千代深切なるものにて、厚意に看病せしかど、日を追て媿態を顯しければ、善兵衛つくづく思ふやう、凡世上は花咲ば集り、花散れば離散する習ひなるに、我もとより薄命にて、漸く車力を以て其日を送りしさへ、妻の貧苦に迫るを心苦しく思ひしに、今斯人と交も成がたき惡疾を得しかど、更に意に懸る氣色もなく、益貞操を盡す事の不便さよ、是則貞女烈女といふものなるべし、かゝる貞節の